令和８年度
若年性認知症自立支援ネットワーク研修

若年性認知症サポートセンターの機能と役割
～本人を中心に支援をつなぐ～

若年性認知症支援コーディネーター
生田　美希

本日の内容

- 若年性認知症について
- 若年性認知症支援コーディネーターの役割と
  サポートセンターの業務等について
- 多職種でつくる支援のかたち

若年性認知症とは

「65歳未満で発症した認知症」

発症年齢で区分した概念であり、若年性認知症という独立した病気ではない

- 18歳から64歳人口における、人口10万人当たりの若年性認知症有病率は50.9人
- 全国の若年性認知症の数は約35,700人　埼玉県は約2,200人
- 最初に症状に気づいた年齢は平均54.4歳

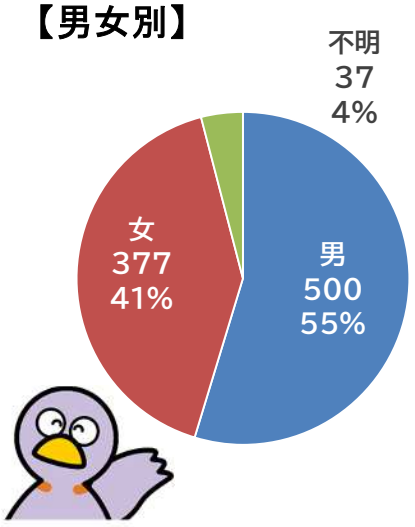
栗田主一：わが国の若年性認知症の有病率と生活実態．精神医学62：1429-1444.2020

3

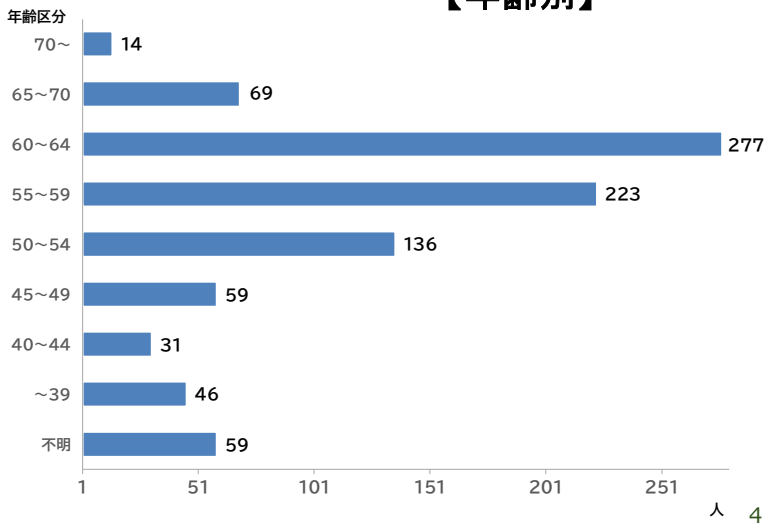
若年性認知症の相談状況（性別・年齢）

2019年4月～2026年3月までのサポートセンターの新規相談：914件

【男女別】



【年齢別】



4

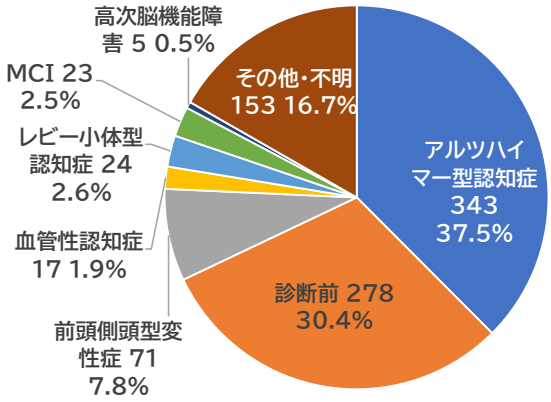
若年性認知症の方の原因疾患について

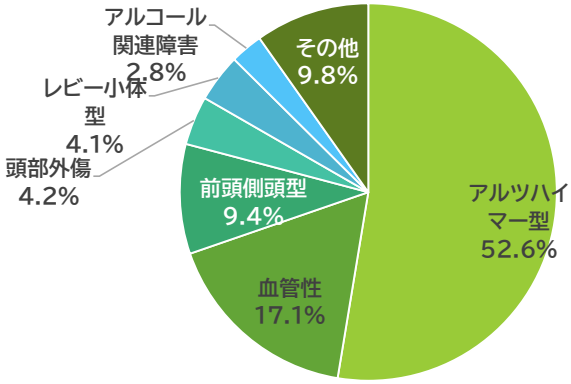
【原因疾患別】

2019年4月～2026年3月までの
サポートセンターの新規相談：914件

粟田主一：わが国の若年性認知症の有病率と生活実態
精神医学62：1429-1444. 2020







認知症の方が受ける主な検査

- **認知機能検査**（長谷川式、MMSE等）
  認知機能を客観的に評価する神経心理学的検査法
- **MRI検査**（磁気共鳴画像診断法）
  脳の萎縮の程度（脳の形態）が分かる
- **SPECT**（単一光子放射断層撮影）
  特殊な放射性医薬品を注射し、脳の血流状態を画像化するため、脳の萎縮が始まる前から脳機能の低下が発見できる
- **髄液検査**
  画像検査だけでは診断が困難なアルツハイマー病の診断をする際等に実施

若年性認知症の場合MRI検査で確定診断される方は少なく、SPECTや髄液検査まで行いやっと確定診断される方が多い

初期症状は、仕事や生活の小さな変化に現れる

中核症状

◆記憶障害　◆見当識の障害　◆実行機能の障害　◆注意障害
◆理解力・判断力の低下　◆失認・失行　◆失語　など

仕事中に気づく変化（例）

- 仕事の段取りが悪くなり、残業が増える
- 約束の時間を間違える
- 予定を忘れる
- 使い慣れた機器の操作に戸惑う
- 電話を終えると、内容を忘れている
- 指示や書類の内容を理解しづらい
- 同じ質問を繰り返してしまう
- 会議や打ち合わせの話についていけない
- 出社日を間違える（土日に出社）

生活の中で気づく変化（例）

- 気分が落ち込む
- 車の車庫入れが苦手になる
- 料理の味付けが変わる
- 家事の段取りが悪くなる
- ネクタイが結びにくくなる
- 子どもの学校の手続きを忘れる
- 予定を忘れる
- 小銭で支払えなくなる
- 目が見えづらくなる

7

老年期の認知症との違い

	若年性認知症の特徴
原因疾患	原因となる疾患が多岐にわたる
発症傾向	発症年齢が若く、男性に多い／高齢発症に比べて数が少ない
気づき・受診	初期症状が認知症特有ではなく判断しにくい／異常に気づいても受診が遅れることがある
生活課題	就労・経済面・子育て・社会参加・将来設計など多岐にわたる
制度・支援	医療・福祉・就労・困窮など、様々な制度・サービスを横断的に利用する必要がある
主介護者	主介護者が配偶者に集中し、親の介護や子育てとのダブルケアになることがある
社会活動	体力があり、福祉的な就労やボランティアなど社会的活動が可能である

「若年性認知症ハンドブック　改定4版」「若年性認知症支援コーディネーター配置のための手引書」参考

8

若年性認知症支援コーディネーターについて

【若年性認知症支援コーディネーターとは】
2015年度の認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）に基づいて、各都道府県に若年性認知症の相談窓口が設置され、関係機関の調整役として若年性認知症支援コーディネーターが配置されることとなった

【若年性認知症支援コーディネーターの役割】

- 若年性認知症支援コーディネーターは、若年性認知症の人のニーズにあった関係機関やサービス担当者との「調整役」になることが期待される
- 必要に応じて、職場や福祉サービス事業所等と連携し、就労継続や居場所づくりに働きかけるなど、本人が自分らしい生活を継続できるよう本人の生活に応じた総合的なコーディネートを行うことが求められる

「若年性認知症支援コーディネーター配置のための手引き書」より

サポートセンター紹介





ダウンロードはこちらから

若年性認知症サポートセンターの主な業務



1．相談窓口（本人･家族･専門職･企業等から）

- ●相談内容の確認と整理（アセスメント）
- ●適切な専門医療へのアクセスと継続の支援
- ●利用できる制度･サービスの情報提供
- ●関係機関との連絡調整　等

2．若年性認知症支援連携体制の構築

- ●若年性認知症自立支援ネットワーク研修の実施
- ●若年性認知症自立支援ネットワーク会議での報告
- ●地域開催の研修会講師
- ●リーフレットの配布、メールマガジン、Facebookによる普及啓発活動　等

3．若年性認知症の人や家族の交流会の開催

- ●若年性認知症オレンジカフェ（リンカフェ）の開催
- ●ピアサポート事業の実施
- ●家族交流会の開催　等

4．企業等への雇用継続理解促進事業

- ●企業向け若年性認知症セミナーの開催
- ●埼玉県地域両立支援推進チーム会議での報告
- ●企業訪問　等

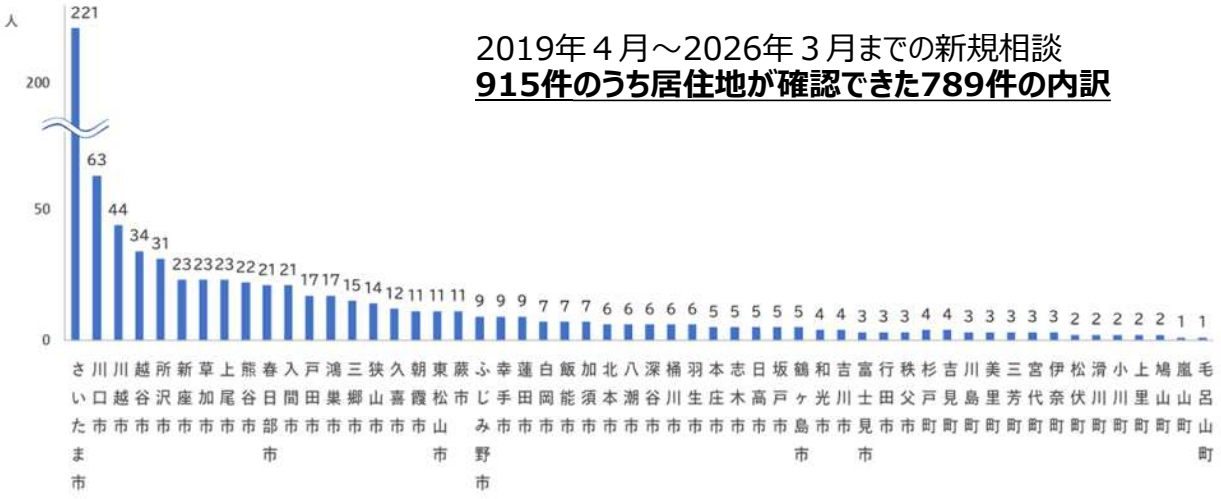
5．就労等社会参加支援

- ●本人ミーティングの開催　●イベントの企画と実施（リンカフェ）
- ●就労関係機関との連携　●認知症カフェ立ち上げ支援
- ●本人発信の場のコーディネート

11

埼玉県･さいたま市若年性認知症サポートセンター

新規相談者の住所地



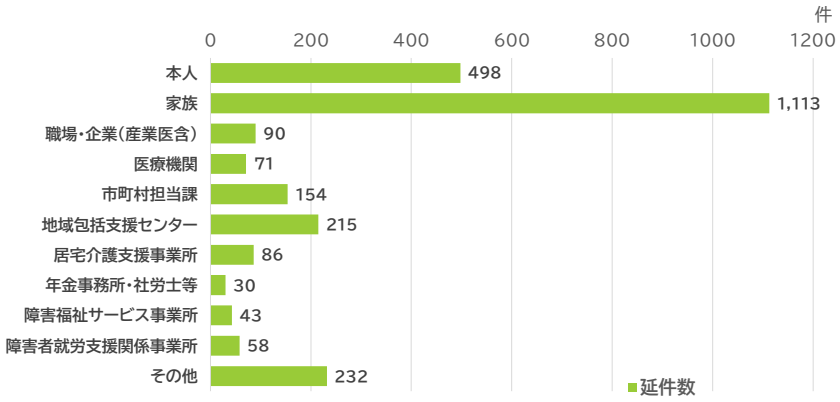
2019年４月～2026年３月までの新規相談
915件のうち居住地が確認できた789件の内訳

12

2025年度　若年性認知症サポートセンターの相談実績

相談者種類別

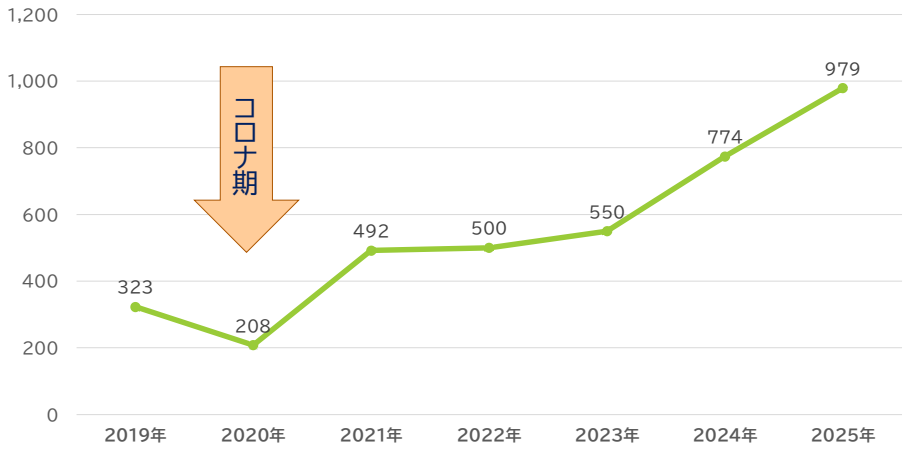
相談者	新規	延件数
本人	31	498
家族	69	1,113
職場・企業（産業医含）	5	90
医療機関	10	71
市町村担当課	4	154
地域包括支援センター	11	215
居宅介護支援事業所	5	86
年金事務所・社労士等		30
障害福祉サービス事業所		43
障害者就労支援関係事業所		58
その他	7	232
合計	142	2,590



- ◆ 延べ相談数は2,590件、１か月平均216件（前年比平均179件）
- ◆ 新規相談数は142件、１か月平均12件（前年比平均11件）
- ◆ 家族からの相談が最も多く、次に本人、地域包括支援センターと続く

関係機関との連携数の推移

2019年度～2025年度までの本人・家族以外からの相談件数の推移

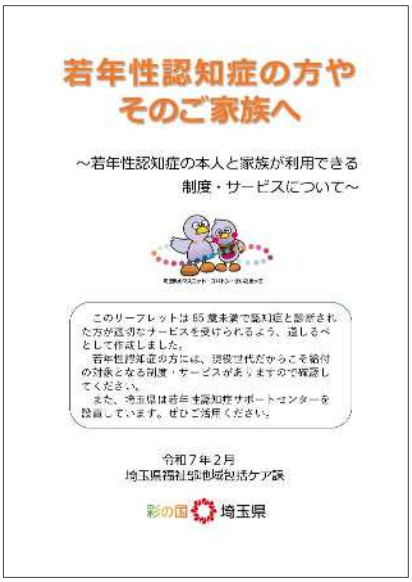


若年性認知症の方の支援課題

	主な課題
公的支援	・専用の相談窓口が市町村にない ・利用可能な医療、介護、障害福祉、就労などの情報が得にくい
医療支援	・初発症状が認知症に特有ではなく診断しにくい（うつ病や更年期などと間違われる） ・診断後のフォローが得られにくく、相談機関に繋がらない
経済的支援	・経済的に大きな変化がある（雇用形態の変化で収入が減る、失業により収入がなくなる、治療費、学費、ローンの支払いがある など）
介護・障害支援	・事業所は対応のノウハウの蓄積が少ない ・利用者は受け入れ可能な事業所の情報がない ・若年性認知症の方が求めるサービスと既存のサービスがマッチしない
社会参加支援	・進行性疾患であるため就労継続が難しく、退職後の社会的な居場所が探しづらい ・周囲の理解不足や自らの病状への不安により、社会参加の機会が少なくなる ・休職中や傷病手当金受給中に生じる制度の狭間も影響している

15

経済的な変化を支える　～社会保障制度の活用～



自立支援医療（精神通院医療）

精神障害者保健福祉手帳

指定難病医療給付制度（前頭側頭型認知症）

障害基礎年金

障害厚生年金・障害共済年金

傷病手当金

雇用保険（失業等給付）

状況に応じて・・・　生活困窮者自立支援事業　生活保護

日本学生支援機構奨学金　成年後見制度　など

ダウンロードはこちらから

16

サポートセンターの相談支援と多機関連携

相談支援
本人・家族の思いを受け止め、生活全体を支える

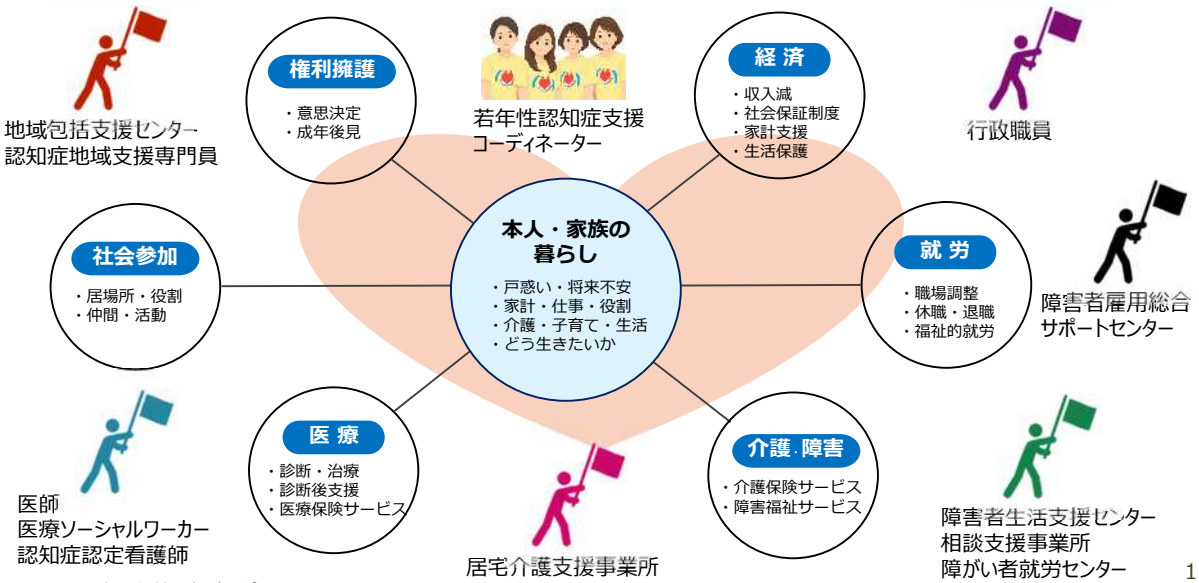
多機関連携
関係機関をつなぎ地域の支援体制をつくる

個別支援を通じて　地域の支援ネットワークを育てる

【連携機関】
行政（障害福祉・高齢・介護保険・生活困窮・子ども など） ・ 更生保護施設 ・ 警察 ・ ハローワーク ・ 年金事務所
地域包括支援センター ・ 社会福祉協議会 ・ 成年後見センター ・ 介護保険サービス事業所 ・ 認知症初期集中支援チーム
医療機関 （主治医） ・ 認知症疾患医療センター ・ デイケア ・ 訪問看護 ・ 士業事務所 ・ 企業
障害者就労支援センター ・ 障害者生活支援センター ・ 地域障害者職業センター ・ 就労移行支援 ・就労継続支援 等

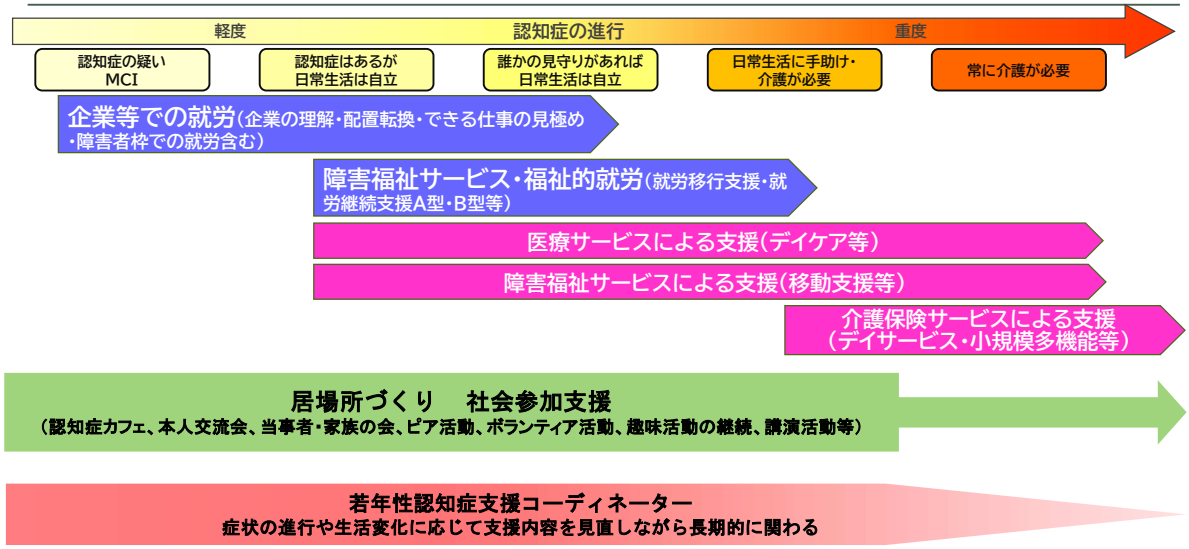
17

本人・家族を中心につながる支援とは

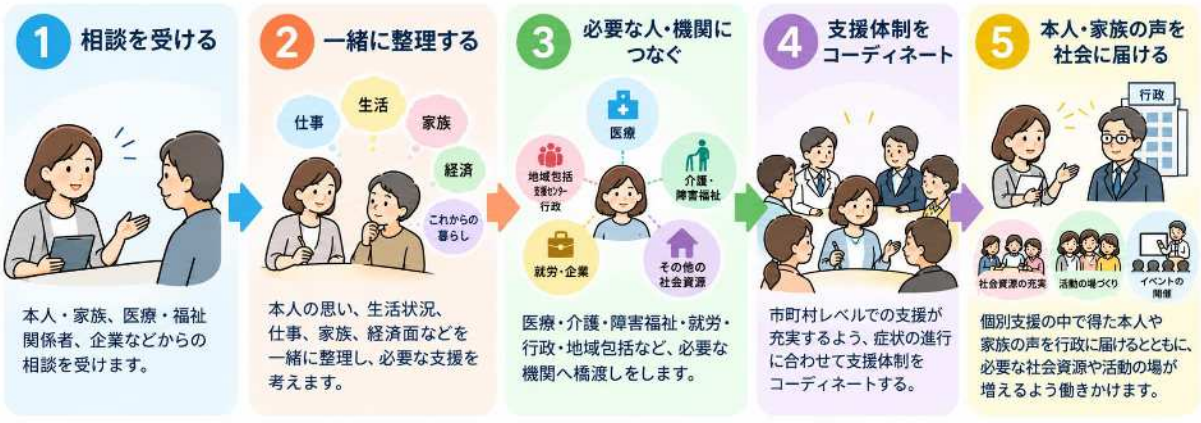


18

将来を見据えた中・長期的な支援とは



個別支援から地域づくりへ　～本人・家族の声をかたちに～



相談支援を通して気がついた「つながる場」の大切さ

本人からは

仕事でミスをして職場での居場所がなくなった

自分で自由に行きたい場所に行けなくなった

失敗するかもしれないと思うと新しいことに挑戦できないし、やる気も出ない

忘れないように、迷惑をかけないようにと気を張り心が休まる場所がない

家族からは

仕事を辞めたら家に居るしかない

火を出しても困るので、家事は家族が代わりにしている

失敗してショックを受けて落ち込むのを見たくない

本人が行きたがらないし、家族も仕事があって一緒に行けない

同じ境遇の家族と話がしたい

専門職からは

若年性認知症の方のサービスがない

高齢者の方ばかりの居場所だと行きたがらないだろう

話せるし身の回りの事はできる。困り事は無いのでは？

若年性認知症初期の方の相談経験がなく、どう支援したらよいか分からない

若年性認知症の家族の思いを受け止める場所がない

・同じ思いでいる若年性認知症の本人同士が出会える場
・本人が安心して楽しめ、家族も安心して送り出せる場
・専門職が初期の若年性認知症の本人に出会える場
・家族が思いを分かち合い、情報が得られる場

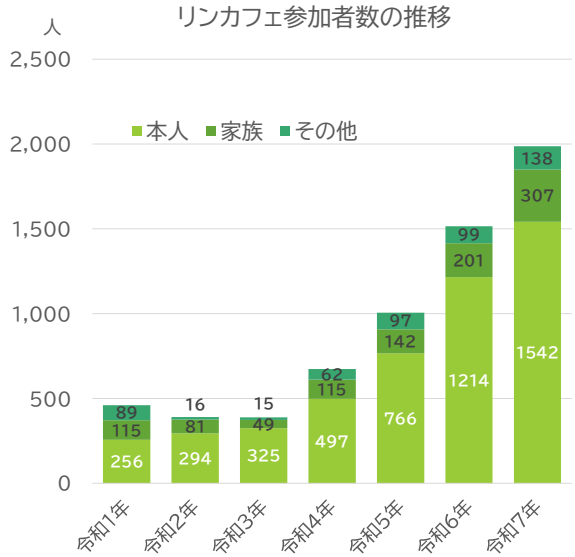
リンカフェ（本人カフェ）毎週木曜日
すまいり～ホーム（個別ピア）毎週火曜日＋随時
家族交流会（６つの交流会）

21

埼玉県・さいたま市若年性認知症サポートセンター

思いを分かち合える場所（本人）①





22

思いを分かち合える場所（本人）②



2025年7月1日～　さいたま市在住の方が対象
2026年4月1日～　埼玉県全域に対象者を拡大

活動実績（2026年4月～9月）

<個別支援>
ピアサポーター活動人数　５８名（延べ）
参加者人数　４３名（延べ）

<出張支援>
ピアサポーター活動人数　7名（延べ）
出張回数　４回
出張場所　朝霞市・川越市・所沢市・春日部市

23

埼玉県・さいたま市若年性認知症サポートセンター

集団支援と個別支援の様子

«リンカフェの様子»
ピアサポーターでもあるスタッフが司会進行



参加者「認知症になってもみんな元気で楽しんでいることが分かって、自分も大丈夫だと思えた」「少し元気が出てきた。来週もまた来る」

«すまいり～ホームの様子»
少人数だから話せることがある



利用者「自分だけではなくみな同じ思いをしていることが分かった」「同じ病気だからこそ話せることがある」「安心して生活するためのヒントをもらえた」「病気を受け入れられない気持ちを話すことができた」



ピアサポーター「認知症になった自分が誰かの役に立てることが嬉しい」「仲間がいる。大丈夫だよって伝えたい」

24

埼玉県・さいたま市若年性認知症サポートセンター

思いを分かち合える場所（家族）

・たんぽぽ　・ひまわり　・前頭側頭型認知症の会　・家族の夜会　・子世代のつどい

・親兄弟姉妹の会（今年度から）



「誰かの役に立ちたい」の思いを大切に

わたしたち、オレンジ大使です！
～認知症になっても大丈夫って伝えたい～

若年性認知症本人(リンカフェメンバー)による 座談会
テーマ「むしろ 人生パワーアップ！」



“これでいいのだバンドとリンカフェオールスターズ”の演奏

埼玉県・さいたま市若年性認知症サポートセンター

さいごに・・・

若年性認知症の方が住み慣れた地域で安心して自分らしく暮らし続けられるように・・・
私たち若年性認知症支援コーディネーターも、地域の支援ネットワークの一員として、皆様と共に考え、支援をつないでいきたいと思います

ご清聴ありがとうございました

